研究ノート

テニス参加者の観戦阻害要因に関する検討
—国内2大プロトーナメントに着目して—[†]

霜 島 広 樹* 木 村 和 彦**

Barriers to Spectator Behavior among Tennis Participants:
Focusing on Two Big Tournaments in Japan[†]

Hiroki SHIMOZIMA* and Kazuhiko KIMURA**

Abstract

The purpose of this study was to examine barriers to spectator behavior among tennis participants in order to increase the number of participant spectators in tennis. We focused on two big tennis tournaments in Japan to clarify this.

We extracted barriers to spectator behavior by qualitative methods, and then analyzed the degree of these barriers by statistical methods. As a result, the main findings are summarized as follows:

- 1) Barriers to spectator behavior among tennis participants consist of “Time”, “Distance”, “Lack of information”, “Absence of cynosure players”, “Cost”, “Unaccompanied”, “Partner”, “Child”, “TV”, “Lack of intention and interest”.
- 2) “Time” is the largest barrier to spectator behavior among tennis participants, so the tactic of changing the time of main events from daytime to nighttime could be effective. Additionally, “Lack of information” and “Cost” were relatively large barriers to spectator behavior in tennis participants, so marketers need to distribute discount tickets that also promote informational purposes.

Key words : Barriers, Spectator Behavior, Tennis

1. 緒 言

スポーツ白書¹⁾によると、テニスは推定実施人口が約700万人も存在する普及率の高いスポーツである。経済産業省²⁾によると、日本においてテニスクラブは1,531存在しており、スポーツ参加、すなわち「するスポーツ」という

視点から見ると、テニスは規模が極めて大きい種目と言えるだろう。

その一方で、スポーツ観戦という視点からテニスを見た場合、テニスは極めて規模の小さい種目であることが指摘されている³⁾。スポーツ白書¹⁾においては、テニスの観客動員数については、そもそも記載の対象とさえされておらず、

[†] 原稿受付 2012年6月29日 原稿受諾 2012年8月14日

* 早稲田大学大学院スポーツ科学研究科 〒202-0021 東京都西東京市東伏見2-7-5

** 早稲田大学スポーツ科学学術院 〒202-0021 東京都西東京市東伏見3-4-1

* Graduate School of Sport Sciences, Waseda University, 2-7-5, Higashifushimi, Nishitokyo, Tokyo, Japan (202-0021)

** Faculty of Sport Sciences, Waseda University, 3-4-1, Higashifushimi, Nishitokyo, Tokyo, Japan (202-0021)

霜島・木村⁴⁾の行った調査においても、観客動員数が2万人を超える観戦イベントが年間を通して2度しか存在しないといった事実が明らかになっている。霜島³⁾は、「テニスのような参加人口が極めて多いスポーツにおいては、参加者をいかにして観戦者とするかといった方策をとることも有効である」と指摘しており、テニスを行わないものを観戦へ導くだけでなく、わが国に存在する数多くのテニス参加者を上手く観戦者へと誘導していくことも重要であると考えられる。佐野⁵⁾は、「国内で開催される国際スポーツイベントに多くの観戦者が増加することで、経済面だけでなく競技の普及や振興の発展が強く期待されうる」と述べており、テニスの観戦者を増加させることには、単に経済的な便益に留まらない、大きな意味があると考えられる。同じ球技系・個人種目であるゴルフが2009年度には、男子・女子・シニアのプロツアー観客動員数が約100万人を数えたことから、可能性のあるフィールドとして、今後のテニス観戦市場の拡大が望まれる。

スポーツ観戦者に関する研究、すなわちスポーツ観戦行動に関する研究は、主にスポーツ消費者行動の研究領域において多くの関心を集め、これまでも多くの科学的知見が蓄積されてきている⁶⁾。スポーツ消費者とは、松岡⁷⁾によると、金銭的成本（料金など）および非金銭的成本（時間・労力など）を費やしてスポーツを「する」または「見る」という形態で体験し、身体的および心理的ベネフィットの獲得を目的としてスポーツを消費する個人である。つまり、スポーツ観戦者とは、このスポーツ消費者の定義を「見る」に限定したものであると捉えることができる。

こういった中で、消費者拡大に関しての戦略の1つとして、観光などの余暇活動の研究領域においては、消費行動への阻害要因への注目が高まってきている⁸⁾。Crawford and Godbey⁹⁾、Crawford, Jackson and Godbey¹⁰⁾は、阻害要因は「個人内」、「対人的」、「構造的」という3つの要因から構成されていることを明らかにして

いる。個人内要因とは、パーソナリティ、レジャーに対する態度や価値観、興味の欠如など個人の内部に生じる心理傾向のことであり、また、対人的要因とは家族や友人など他者との社会的相互作用から生じるもので、一緒に活動する相手がいないなどの要因である。そして、構造的要因とは、時間や費用の不足、活動環境へのアクセスの困難さといった主に外的な状況要因のことである⁸⁾。

ところで、前述した個人的要因である「態度」や「興味」の度合いであるが、スポーツ消費者行動論においては、態度は行動への意図（興味）を、行動への意図は行動を予測する主要因であり、スポーツやレジャー・レクリエーションの分野の研究でも、その重要性が報告されている¹¹⁾。この考え方は、行動は直接予測されるのではなく、行動への意図（行動意図）が予測変数とされたとした、Fishbein and Ajzen¹²⁾による合理的行為理論（Theory of Reasoned Action: TRA）に起源を成しており、TRAは、この理論をジョギング行動に適用したRiddle¹³⁾によって有効性が検証されている。

上記のような、行動と行動意図との関係性を踏まえた上で、「個人内」、「対人的」、「構造的」という行動に対しての阻害要因を捉えなおすと、行動の阻害要因はまず、個人内阻害要因である「行動意図が低いこと（興味・関心の欠如）が行動に結びつかせない」と、対人的阻害要因、構造的阻害要因である「行動意図は高いが、一緒に活動する相手がいない」、「時間的、金銭的な余裕がない」の2つから構成されることが考えることができる。これを観戦行動に置き換えると、観戦の阻害要因は、「そもそも、観戦意図が低いことが観戦行動に結びつかせない」という個人内要因と、「観戦意図は高いが、一緒に観戦に行く相手がいない」、「観戦意図は高いが、時間的、金銭的な余裕がない」という対人的、構造的要因から構成されていると考えることができる。

「観戦行動への意図が低いこと（個人内要因）が原因で、観戦行動に結びつかない」といった

問題に関しては、観戦行動の意図を高める様々な研究がこれまで数多くなされてきており、研究の蓄積は着実に進んでいると言える。しかし、一方で「観戦行動への意図は高いが、観戦阻害要因（対人的要因・構造的要因）が原因で、観戦行動に結びつかない」といった議論は、これまで殆どなされてきていない。わが国において、スポーツ観戦に関する、対人的要因・構造的要因における阻害要因の先行研究としては、12歳以下の子どもを持つ母親のスポーツ観戦者行動に着目した藤本他¹⁴⁾が挙げられるものの、他に主な研究は管見ながら見られず、観戦阻害要因についての理解は、まだあまり進んでいないことが窺える。

以上より、今後のテニスを始めとするスポーツ観戦者の拡大においては、特に、この対人的・構造的要因における観戦阻害要因について理解を深めていく必要があると考えられる。

2. 研究目的

本研究は、テニス観戦における観戦阻害要因に着目をした。まず、研究1では、テニス参加者におけるプロテニストーナメントへの観戦阻害要因を明らかにすることを目的とした。そして、研究2では、観戦意図は高いが観戦には行かなかったテニス参加者におけるプロテニストーナメントへの観戦阻害要因、つまり「対人的要因」と「構造的要因」における観戦阻害要因に焦点を当て、それらの大きさを量的に検討することを目的とした。

なお、本研究においては、スポーツ観戦を「大会等のスポーツイベントを試合会場で直接観ること」とし、TVやインターネットなどのメディアを媒体にした視聴は含めないものとする。

3. 研究1：テニス参加者におけるプロテニストーナメントへの観戦阻害要因

3.1 プロテニストーナメントへの観戦阻害要因の構成

研究1では、テニス参加者のプロトーナメントへの観戦阻害要因（以下、観戦阻害要因とす

る）を明らかにするために、テニス参加者を対象にインタビュー調査を行った。インタビュー調査は、2010年5月4日～5日に、東京都S区Tテニスクラブにおけるテニス参加者、そして埼玉県T市にあるS公共テニスコートにおけるテニス参加者に対して行った。インタビューの内容は、まず、わが国における代表的な2大プロテニストーナメントである楽天ジャパンオープン（旧AIGジャパンオープン）、東レ・パシフィックオープンへ観戦に訪れた経験があるかどうかを尋ね、観戦経験がなければ、これまで観戦に行かなかった理由について質問した。取得したデータはその場でフィールドノートに記録した。

インタビュー調査の結果、74人からデータが取得できた。内訳としては、Tテニスクラブにおけるテニス参加者が60人、公共テニスコートでのテニス参加者が14人であった。

3.2 結果（KJ法によるテニス観戦阻害要因の抽出）

インタビュー調査から得られたデータからプロテニストーナメントへの観戦阻害要因の抽出を試みた。データの分析は、川喜田¹⁵⁾によるKJ法を用いた。KJ法は、多くの断片的なデータを統合し、核心となる要因を抽出できるという点において優れており、この手法はテニス参加者の観戦阻害要因をうまく抽出・整理できる方法であると判断した。

まず、インタビューの内容を箇条書きでまとめ、テニスへの参加者の、観戦行動を阻害していると考えられる要因に関連のある各々の内容をコード化し、46枚のカードに記入した。これを基に、スポーツ経営学を専攻する大学院生と共に分類、整理を行った。そして、全てのカードについて内容の近いもの同士を集め、10のグループを編成した。その後、10のグループに対し、各々見出しを付けた（表1）。

分析の結果、「大会の開催日時に対し時間が合わない」という【時間】、「大会会場の距離が遠い」という【距離】、「大会開催に関する情報

表1 KJ法から抽出された観戦阻害要因

観戦阻害要因	代表的なコード
時間(10)	時間が合わない 日程が合わない
距離(2)	会場が遠い
情報不足(2)	どこでやっているか知らない 情報が入って来ない
同伴者不在(4)	一緒に行く人がいない 一人で行っても面白くない
注目選手不在(9)	知っている選手がいない
コスト(5)	チケットが高い お金がなかった
配偶者の存在(1)	仕事をしてる旦那に対し後ろめたい
子どもの存在(6)	子どもがいるので世話をしないといけない 子どもがいるので縛りがある
TV中継(2)	TVで十分だから
興味・関心の欠落(5)	興味がないから 観るのが好きじゃないから

() は各グループを構成したコードの数

がない」という【情報不足】、「一緒に行く人がいない」という【同伴者不在】、「知っている選手がいない」という【注目選手不在】、「チケットなどが高い」という【コスト】、「配偶者に対し後ろめたい」という【配偶者の存在】、「子どもの世話をしなければならない」という【子どもの存在】、「TV中継で観戦すれば十分」という【TV中継】、そもそも観戦に興味・関心がないという【興味・関心の欠落】といった10要因が、テニス参加者における観戦阻害要因として抽出された。

3.3 考察（研究1）

表1で示した結果を、Crawford and Godbey⁹⁾、Crawford, Jackson and Godbey¹⁰⁾が述べた「個人内」、「対人的」、「構造的」という観戦阻害要因の構成へ当てはめて考えてみると、「興味・関心の欠落」は「個人内・観戦阻害要因」に該当し、「同伴者不在」、「配偶者の存在」、「子どもの存在」は「対人的・観戦阻害要因」、そして、「時間」、「距離」、「情報不足」、「注目選手不在」、

「コスト」、「TV中継」は「構造的・観戦阻害要因」に該当すると考えられる。分析の結果から、「注目選手不在」や「TV中継」といったスポーツ観戦特有とも見られる観戦阻害要因が抽出されたことは興味深い結果であった。

研究2では、緒言でも述べたように、「対人的」、「構造的」における観戦阻害要因に着目して研究を進めていく。

4. 研究2：観戦阻害要因の検討

4.1 研究方法

研究2においては、「対人的要因」、「構造的要因」における観戦阻害要因に着目し、それらの大きさを量的に検討することを目的とした。よって、研究1で明らかになった10の観戦阻害要因から「個人内要因」である「興味・関心の欠落」を除外した9の観戦阻害要因を対象に、研究2は行われるものとした。

緒言でも述べたように、「対人的要因」、「構造的要因」における観戦阻害要因は、「観戦意図は高いが観戦に行かなかった人」に対し作用している要因であると考えられる。よって、「対人的要因」、「構造的要因」における観戦阻害要因について検討するためには、「観戦意図は高いが、観戦に行かなかったサンプル」の構成を行う必要があった。よって、研究2では、国内で行われるプロテニストーナメントに対し「観戦意図は高いが、観戦に行かなかったサンプル」を構成することで、「対人的要因」、「構造的要因」における観戦阻害要因の程度について検討を行うこととした。研究目的を達成するために、研究2では質問紙調査による統計的な手法を用いた。

質問紙の内容は、「基本的属性」、「プロテニストーナメント観戦意図」、「プロテニストーナメント観戦行動」、「プロテニストーナメントへの観戦阻害要因」の4つから構成された。プロテニストーナメントに関しては、研究1同様に、わが国における代表的なプロテニストーナメントである「東レ・パンパシフィックオープン」と「楽天ジャパンオープン」を対象とすること

とした。基本的属性については、テニス参加者の属性を把握するために、性別・年齢・職業について質問した。そして、プロテニストーナメント観戦意図に関しては、「あなたは、東レ・パンパシフィックオープンや楽天ジャパンオープンといったテニスのプロトーナメントを、試合会場で観戦してみたいと思いますか」といった形式で、リッカート法・7段階尺度にて質問した。加えて、テニストーナメント観戦行動については、2010年度において東レ・パンパシフィックオープン、もしくは楽天ジャパンオープンを、試合会場で観戦したかどうかを質問項目として設定した。

そして、プロテニストーナメント観戦阻害要因については、上記のプロテニストーナメント観戦行動に関して「観戦には行かなかった」と回答したサンプルを対象に、質問項目を設定した。質問項目は、KJ法にて抽出された10の観戦阻害要因から、個人内要因である「興味・関心の欠落」を除外した9つの要因（時間、距離、情報不足、同伴者不在、コスト、注目選手不在、配偶者の存在、子どもの存在、TV中継）について質問した。具体的には、「あなたが今年、楽天オープン、並びに東レ・パンパシフィックオープンを会場で観戦しなかった理由として、以下の質問について各々当てはまる数字に1つだけ○をつけて下さい」といった形式で、「時間が合わなかったから」、「会場が遠いから」、「情報が入って来なかったから」、「一緒に行く人がいなかったから」、「応援したい選手がいなかったから」、「チケットが高いと感じたから」、「観戦に行くことで、夫（妻）への後ろめたさを感じるから」、「子どもの世話があるから」、「TVでの観戦で十分だと思ったから」を質問項目として設定した。そして、「強く当てはまる」から「全く当てはまらない」のリッカート法7段階尺度にて、9つの質問項目すべてに対し回答を求めた。

4.2 調査期間・調査場所

調査期間は2010年10月11日～11月11日とし

表2 観戦意図の大きさと観戦行動の関係

	全サンプル数	観戦に行ったサンプル数
観戦意図7	98	46
観戦意図6	66	17
観戦意図5	56	7
観戦意図4	35	0
観戦意図3	9	0
観戦意図2	11	0
観戦意図1	18	0

た。この期間に定めた理由としては、2010年度・楽天ジャパンオープンの全日程が終了するのが2010年10月10日であったということが挙げられる（東レ・パンパシフィックオープンは9月末に全日程が終了）。調査期間が長くなると、記憶も曖昧になる可能性が生じるため、調査期間を1ヶ月と定めた。

また、質問紙の配布場所に関しては、東京都S区のTテニスクラブ、埼玉県T市にあるS公共コート、そして東京都にあるM大学のテニスサークル用コートにて、テニス参加者に対し質問紙の配布を行った。配布場所から、楽天ジャパンオープン、東レ・パンパシフィックオープンが行われる「東京都・有明テニスの森」までの所要時間は、いずれも時間にして1時間から1時間半程度であった。

配布に関しては、筆者の自己紹介をした上で直接手渡しをした。回答はその場でしてもらい、記入終了後は速やかに回収を行った。記入に関しての疑問点、記入漏れなどの不都合が生じた場合は、筆者がその場で対応した。回答者の都合で、どうしてもその場での記入が難しいものに関しては、後日回収を行った。

4.3 結果

4.3.1 観戦意図の高いサンプルの抽出

調査の結果、取得されたサンプル数は304であり、有効回答数は293であった（テニスクラブ170、公共テニスコート75、大学テニスサークル48）。研究目的でも示したように、研究2では「観戦意図が高いが観戦に行かなかった参

表3 「観戦意図5以上で観戦に行かなかったサンプル」の基本的属性

	N	%		N	%
性別			職業		
男性	69	47.3	会社員・公務員	39	26.7
女性	77	52.7	管理職・経営	3	2.1
年齢			自営業	6	4.1
10代	15	10.3	自由業	2	1.4
20代	42	28.8	主婦専業	26	17.8
30代	26	17.8	学生	32	21.9
40代	25	17.1	中高生	8	5.5
50代	18	12.3	その他	30	20.5
60代以上	20	10.7			

加者」を対象に検討を行うことから、まず、観戦意図の高いサンプルの抽出を行うこととした。

取得された293のサンプルにおいて、プロトーナメントへの観戦意図の高さと観戦・非観戦の割合を表にしてまとめた(表2)。結果、観戦意図が1から4のサンプルにおいて観戦へ行ったサンプルはなく、観戦意図5から初めて、観戦へ行ったサンプルが出現することが確認された。このことから、研究2では観戦意図が5以上のサンプルを「観戦意図が高いサンプル」とし、分析を進めることとした。統計的分析にはSPSS17.0を用いた。

4.3.2 観戦意図の高い非観戦者サンプルの基本的属性

「観戦意図は高いが観戦に行かなかったサンプル」を抽出するために、まず、取得されたデータから、2010年度にプロトーナメントへの観戦行動があったサンプルを全て除外した上で、プロトーナメントへの観戦意図が5未満であったサンプルも全て除外した。さらに、対象とされたサンプルから、観戦阻害要因に関する項目が未記入であったものを除外した。結果、得られたサンプルは146であった。サンプルの基本的属性を集計し、表3に示した。

性別に関しては、男女共ほぼ同数となった。年齢に関しては、20代が若干多かったが全体的に大きな偏りはなかった。

表4 観戦阻害要因に関する項目の平均値と標準偏差

観戦阻害要因	Mean	SD
時間	5.22	2.04
距離	3.41	2.04
情報不足	3.14	2.22
同伴者不在	2.91	2.06
注目選手不在	2.38	1.60
コスト	3.29	2.07
配偶者の存在	1.41	1.18
子どもの存在	1.65	1.55
TV中継	3.25	1.97

続いて、観戦阻害要因に関する9項目の、各々の平均値と標準偏差を算出した(表4)。

最も平均値が大きかったのが、「時間」であり、「距離」、「コスト」、「TV中継」、「情報不足」、「同伴者不在」と続いた。「配偶者の存在」、「子どもの存在」は共に平均値は低かった。

4.3.3 「会社員・公務員」、「専業主婦」、「学生」ごとの観戦阻害要因の大きさ

続いて、観戦阻害要因の量的な検討をより深めるために、「会社員・公務員」、「専業主婦」、「学生」ごとの観戦阻害要因の程度を検討した。会社員・公務員、専業主婦、学生を分析の対象とした理由としては、表3からも判断できるように、これらのサンプル数は全体の大部分を占めていたことが挙げられる。このことから、会社

表5 「会社員・公務員」,「専業主婦」,「学生」ごとの基本的属性

	会社員・公務員		専業主婦		学生	
	N	%	N	%	N	%
性別						
男性	18	46.2	0	0	21	67.8
女性	21	53.8	26	100.0	10	32.3
年齢						
10代	0	0	0	0	3	9.7
20代	8	20.5	0	0	28	90.3
30代	18	46.2	1	3.8	0	0
40代	9	23.1	8	30.8	0	0
50代	3	7.7	10	38.5	0	0
60代以上	1	2.6	7	26.9	0	0

表6 「会社員・公務員」,「専業主婦」,「学生」ごとの観戦阻害要因

観戦阻害要因	①会社員・公務員		②専業主婦		③学生		分散分析		多重比較結果
	Mean	SD	Mean	SD	Mean	SD	(F)	(p)	
時間	5.0	2.15	5.0	1.95	5.7	2.02	1.33	.270	
距離	3.4	1.88	3.5	1.99	3.8	2.27	.329	.721	
情報不足	3.4	2.15	2.2	1.67	4.5	2.39	7.77	.001	①>②, ③>②
同伴者不在	3.2	2.23	2.5	1.73	3.4	2.32	1.18	.313	
注目選手不在	2.5	1.64	2.2	1.55	2.7	1.92	.433	.650	
コスト	3.1	2.08	3.4	1.74	4.0	2.32	1.98	.144	
配偶者の存在	1.4	1.04	1.7	1.76	1.5	1.29	.525	.593	
子どもの存在	1.3	1.11	2.7	2.46	1.5	1.15	6.78	.002	②>①, ②>③
TV中継	3.6	1.86	3.3	2.13	3.4	2.00	.201	.818	

員・公務員, 専業主婦, 学生は, わが国のテニス参加者において大きな割合を占めていると考え, これらに着目して分析を進めることとした。会社員, 専業主婦, 学生におけるサンプルの基本的属性を表5に示した。

そして, 観戦阻害要因に関する会社員・公務員, 専業主婦, 学生ごとの差異を検討するために, 石村・石村¹⁶⁾を参考に観戦阻害要因に関する9項目について, 1元配置分散分析による統計的検定を行った。そして, 分散分析の結果において統計的有意性が確認されたものについては, 下位検定としてTukey法による多重比較を行った(表6)。

分析の結果, 会社員・公務員において最も平均値の高かった観戦阻害要因は「時間」であり,

次に「TV中継」, 「距離」, 「情報不足」, 「同伴者不在」と続いた。また, 専業主婦においては「時間」が最も高く, 次に「距離」, 「コスト」と続いた。そして, 学生においては「時間」が最も高く, 続いて「情報不足」, 「コスト」, 「距離」の順に高かった。

分散分析の結果「情報不足」と「子どもの存在」の平均値において, 会社員・公務員, 専業主婦, 学生の間に, 1%水準で統計的有意差が確認された。そして, 多重比較の結果から「情報不足」に関しては, 会社員・公務員と学生の平均値が, 専業主婦より高いことが統計的に示された。また「子どもの存在」に関しては, 専業主婦の平均値が, 会社員・公務員と学生を上回る結果となった。

4.4 考察（研究2）

研究2においては、「構造的要因」、「対人的要因」における観戦阻害要因に着目し、それらの大きさを量的に検討することを目的とした。そこで、研究1で明らかになった10の観戦阻害要因から、「個人内要因」である「興味・関心の欠落」を除外した9の観戦阻害要因を対象に検討を行った。

まず、最も平均値が大きかった観戦阻害要因は、「時間」であった。「時間」に関しては、会社員・公務員、専業主婦、学生においても、それぞれ高い平均値となり、このことから観戦意図の高いテニス参加者にとって、「時間が合わない」ことは大きな観戦阻害要因の1つであり、今後観戦者を増加させるためには、この部分を改善する必要性が第1に考えられる。わが国において、サッカーなどの観戦者人口の多いスポーツにおいては、夕方から夜にかけてゲームが開催されることが多いのに対し、テニスの大会は、基本的に平日の日中を中心にゲームが行われる（注1）。平日の日中は、仕事・授業など多くの人にとって都合が悪い可能性が高いと考えられ、これが「時間」という観戦阻害要因の大きさが高い原因になっていると推察される。

楽天ジャパンオープンでは、実際には夜間までゲームが行われていることも多いが、その事実を認識していないテニス参加者も多い可能性が考えられる。また、わが国におけるプロテニストーナメントでは、注目選手が出場する試合が昼から夕方前に行われることが多く（注2）、夜間にメインイベントが行われることは殆どない。USオープンなどを始めとするグランドスラム大会は、メインイベントを夜間に行うことが多く（注3）、そういった戦略も取り入れる必要性があると言えよう。

観戦阻害要因において、続いて大きかったのが、「距離」であった。「距離」に関しては、会社員・公務員、専業主婦、学生ごとの分析においても、全体的に平均値が3～4という中程度

の値となった。河合・平田¹⁷⁾による研究でも、移動距離と観戦回数には負の相関関係があることが指摘されていることから、これは妥当な結果であったと考えられる。今回の研究では、質問紙の配布場所から、楽天ジャパンオープン、東レ・パンパシフィックオープンが行われる「東京都・有明テニスの森」までの所要時間は、いずれも時間にして1時間から1時間半程度であったが、サンプリングを首都圏外から行うことで、違った結果が導かれる可能性もある。わが国における代表的な2大プロテニストーナメントは、いずれも東京・有明で行われるため、首都圏以外の観戦者を増やすためには、首都圏以外でも同様の大会を行い、また大会を行えるような環境を整備することも必要であろう。なお、本研究においては、テニス参加者の各々の居住地から有明テニスの森までの、正確な移動時間を踏まえた分析は行うことができなかったため、この点に関しては今後の課題と言える。

続いて、「情報不足」に関しては、全体平均では3.1であったが、会社員・公務員、専業主婦、学生ごとの分析では、学生が4.5と他に比べて大きく、統計的有意差も確認される結果となった。ここから、大学でテニスを行う学生は、プロテニストーナメントに関する情報収集が上手く行えていない可能性が考えられる。学生の観戦者を増やすためには、この点の改善が必要であると言えよう。

また、「コスト」に関しては、全体平均では「時間」、「距離」に続く、3番目に大きな観戦阻害要因であった。金銭的コストの大きさは、多くの先行研究からも観戦行動へ負の影響を与えることが示唆されており、大会主催者がいかにチケット等の価格をコントロールするかが重要と言えるだろう。会社員・公務員、専業主婦、学生ごとの分析において、統計的有意差は確認されなかったものの、学生の値が4.0と他2つに比べかなり高い数値を示していたことから、「コスト」は学生にとって、1つの大きな観戦阻害要因となっている可能性が窺える。上述した「情報」も踏まえて、学生テニスサークルや部活に

対し、団体レベルでの割引券の配布を行うなど、情報の提供も兼ねたコストに対する戦略を考えることが、観戦者の拡大において有効であると思われる。

また、「TV中継」の大きさは「距離」同様、全体平均が3.25と中程度の値であった。この結果から、TV中継も観戦阻害要因として考えられると言える。しかしながら、TV中継は観戦者の拡大において、テニス参加者以外の層を取り込める可能性があるといった点で重要であると考えられる。よって、テニス参加者に対しては、TV観戦とスタジアム観戦の与える便益の違いや、スタジアム観戦特有の魅力というものを明らかにし、それをアピールしていくことが必要であろう。

一方で、対人的要因である「配偶者の存在」や「子どもの存在」に関しては、全体平均値が2未満となり、わが国におけるテニス参加者にとって大きな阻害要因となっているとは言い難い結果となった。しかしながら、会社員・公務員、専業主婦、学生ごとの検討では、専業主婦において「子どもの存在」の平均値が、会社員・公務員、学生に比べ高い統計的有意差が確認された。このことから、藤本他¹⁴⁾の研究同様、主婦にとって子どもの存在は1つの観戦阻害要因となりうる可能性が考えられる。研究2における「専業主婦」のサンプリングにおいては、子どもの有無までは検討しておらず、藤本他¹⁴⁾の研究のように、「12歳以下の子どもを持つ母親」に限定してサンプリングを行った場合、「子どもの存在」が、より大きな観戦阻害要因になる可能性は十分に考えられる。観戦における主婦層の拡大を考えるのであれば、託児所の併設など、子どもを持った母親への対応も検討していく必要があると言えよう。同じ対人的要因である「同伴者不在」に関しては、全体平均が2.9、会社員・公務員と学生における平均値がそれぞれ3.4という結果になり、「配偶者の存在」や「子どもの存在」と比べると大きな値であった。

最後に、「注目選手不在」であるが、全体として3以下の平均値となり、観戦阻害要因とし

てはあまり大きくないことが明らかとなった。2012年現在において、世界ランキング・トップ20入りを果たした錦織圭選手などの影響も、この結果に繋がっているかと推察される。

5. 結論（今後の課題・研究の限界）

本研究では、テニス参加者の観戦阻害要因を抽出し、それらをより詳細に検討していくことを通して、テニスにおける観戦者を拡大するための研究の蓄積に貢献することができたが、同時にいくつかの限界を浮き上がらせた。

まず、サンプリングの問題が挙げられる。本研究ではテニスクラブ、公共テニスコート、学生テニスサークルを対象にサンプリングを行ったが、わが国においては、これら以外にも当然テニス参加スタイルは存在しており、その点を踏まえて研究は継続される必要がある。

また、本研究ではインタビュー調査から観戦阻害要因を抽出し、その後、抽出された観戦阻害要因を項目化して質問紙を作成した。しかし、質問項目作成において、各観戦阻害要因の具体的な因子構造までは検討を行わなかった。観戦阻害要因について正確な検討を行うためには、因子構造に関する詳細な検討が必要と考えられ、この点は今後の研究課題と言えるだろう。

最後に、本研究ではテニス参加者におけるテニス観戦への阻害要因を検討したが、本研究で得られた知見は、ゴルフ、バドミントン、そして卓球などといった、参加人口の多い個人スポーツにも応用可能であると考えられる。ただし、各スポーツにおける背景の違いなどから、本研究とは相違点も存在する可能性があることから、ゴルフ、バドミントン、そして卓球などのスポーツにおいても、本研究と同様の検討が今後望まれると言える。

（注1）楽天ジャパンオープンテニス、東レ・パシフィックオープンテニスは通常、月曜から日曜までの約1週間かけて行われ、2010・2011年度の楽天ジャパンオープンでは、7日間のうち5日間が平日の開催であり、開始時刻は10時

～12時の間であった¹⁸⁾¹⁹⁾。一方で、2011年度のサッカーJリーグの試合に着目すると、試合の開催日時は平日の水曜日、土日・祝日のいずれかであり、平日開催の場合は夜19:00前後から全ての試合が開始された²⁰⁾。

(注2) 2010年度・ジャパンオープン大会2日目(火曜日)のセンターコートにおいて、男子の試合は12時開始であり、伊藤竜馬VSアンディー・ロディック、錦織圭VSピクトル・トロイツキ、ラファエル・ナダルVSサンティゴ・ギラルド、ヤルコ・ニエルミネンVSジョーウィルフリード・ツォンガの順で試合が行われた。注目カードと考えられる、2010年10月に日本ランキング1位であった錦織圭の試合は、第2試合であり、当時世界ランキング1位であったラファエル・ナダルの試合は第3試合であった。

(注3) 2012年現在において、グランドスラム大会である全米オープン、全豪オープンなどはデイセッション、ナイトセッションとチケットの種類が分かれて販売がなされている。例えば2012年度全豪オープンにおいて、ナイトセッションのロッド・レーバーアリーナ(メインコート)での男子の試合は、大会1日目が「ロジャーフェデラーVSアレクサンドル・クドリアフツェフ」、2日目が「セドリック・マルセル・ステッベVSレイトン・ヒューイト」、3日目が「サム・クエリーVSバーナード・トミック」、4日目が「レイトン・ヒューイトVSアンディ・ロディック」、5日目が「アレクサンドル・ドルゴポロフVSバーナード・トミック」、6日目が「ミロシュ・ラオニッチVSレイトン・ヒューイト」となっており、大会開催国であるオーストラリア出身のレイトン・ヒューイトやバーナード・トミックなどがナイトセッションの試合に多く登場している²¹⁾。

参 考 文 献

- 1) SSF笹川スポーツ財団：スポーツ白書2011, SSF笹川スポーツ財団, 2010.
- 2) 経済産業省：平成16年度特定サービス産業実態調査, <http://www.meti.go.jp/statistics/tyo/tokusabizi/result-2/h16.html>, 2012年6月閲覧.
- 3) 霜島広樹：テニス参加動機が観戦意図へ与える影響に関する研究, テニスの科学, Vol.20, pp.78-79, 2011.
- 4) 霜島広樹, 木村和彦：テニス実施者の観戦行動に関する研究(その1)：スポーツ観戦行動における文献レビューから, 日本体育スポーツ経営学会大会号, Vol.33, pp.47-48, 2010.
- 5) 佐野昌行：国際スポーツイベント観戦者の基礎的特性に関する研究, 日本体育大学紀要, Vol.36, No.2, pp.231-248, 2007.
- 6) 隅野美砂輝, 原田宗彦：スポーツ観戦者行動における感情に関する研究動向, スポーツ産業学研究, Vol.13, No.2, pp.1-11, 2003.
- 7) 松岡宏高：スポーツマネジメントの概念の再検討, スポーツマネジメント研究, Vol.2, pp.33-45, 2010.
- 8) 林幸史：観光行動の促進要因と阻害要因：JGSS-2010のデータを用いて, 日本版総合的社会調査共同研究拠点研究論文集, Vol.11, 2011.
- 9) Crawford, D.W. and Godbey, G. : Reconceptualizing barriers to family leisure, Leisure Science, Vol.9, No.2, pp.119-127, 1987.
- 10) Crawford, D.W., et al. : A hierarchical model of leisure constraints, Leisure Science, Vol.13, No.4, pp.309-320, 1991.
- 11) Ajzen, I. and Driver, B.L. : Application of the theory of planned behavior to leisure choice, Journal of Leisure Research, Vol.24, pp.207-224, 1992.
- 12) Fishbein, M. and Ajzen, I. : Belief, attitude, intension, and behavior : An introduction to theory and research, Reading MA, Addition-Wesley, 1975.
- 13) Riddle, P.K. : Attitudes, beliefs, behavioral intentions, and behaviors of women and men toward regular Jogging, Research Quarterly for Exercise and Sport, Vol.51, No.4, pp.663-674, 1980.
- 14) 藤本淳也, 他：女性のスポーツ参与阻害要因に関する研究Ⅱ：12歳以下の子どもを持つ母親のスポーツ観戦者行動について, 大阪体育大学紀要, Vol.36, pp.84-94, 2005.
- 15) 川喜田二郎：発想法：創造性開発のために, 中央公論新社, 1967.
- 16) 石村貞夫, 石村光資郎：SPSSによる分散分析と多重比較の手順, 東京図書, 1997.
- 17) 河合慎祐, 平田竹男：Jリーグの観客数に影響を与える要因に関する研究, スポーツ産業学研究, Vol.18, No.2, pp.11-20, 2008.

- 18) 楽天ジャパンオープンテニスチャンピオンシップス2010公式ホームページ; <http://rakutenopen.rakuten.co.jp/2010/index.html>, 2012年1月閲覧.
- 19) 楽天ジャパンオープンテニスチャンピオンシップス2011公式ホームページ; <http://rakutenopen.rakuten.co.jp/>, 2012年1月閲覧.
- 20) Jリーグ公式ホームページ; <http://www.j-league.or.jp>, 2012年1月閲覧.
- 21) 全豪オープン2012公式ホームページ; http://www.australianopen.com/en_AU/index.html, 2012年1月閲覧.